

"Keep on the left"

いつも そばにいて

北
美
波



きた み なみ
北 美波

♡年 9月27日、東京生まれ。天秤座のB型。大学卒業後、旅する音楽ライターとして活動。その後、小説にも手を出して、今や大忙しのマルチ・レディ。趣味はドライブ、一人旅、日光浴。尾崎豊、大好き！ 椎名誠、カレー、猫、上岡龍太郎、アイスミルクティ、トルコ石も……。でも、何ととっても、みんなからのいろんな手紙を読むときが、一番ウレシイ。よろしくね♡！



きた み なみ
北 美波

いつもそばにいて

1989年11月20日 初刷

発行者／荒井 修
発行所／株式会社 徳間書店
東京都港区新橋 4-10 郵便番号105
電話 東京03(433)6231
振替 東京 4-44392
印刷・製本／凸版印刷株

©Minami Kita 1989 き-5-1

printed in Japan

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-658937-5

いつもそばにいて

"Keep on the left."

北 美波

いつもそばにいて
目次

- 1 トム・ボーイの朝は悪夢で始まる
- 2 ボクにとって音楽は……
- 3 宿命的な出会い
- 4 小樽^{おたる}飲み屋街“入船”
- 5 オイシイ話
- 6 女難の相
- 7 庵戸^{おりと}“不良”京介
- 8 ヒヨコとボクを結ぶ赤い糸
- 9 秘密がピンチ！

10	私、死にます！	113
11	大人たちの純愛	130
12	もしかしたら「恋愛」だ！	145
13	Aチームの危機	156
14	札幌ロック・ウェーブ	166
15	Yes, No.	179
16	ボクが女の子になる日	193
17	領クン・ON THE ROAD	207
	♡あとながき	218

イラスト／徳田みどり

い
つ
も
そ
ば
に
い
て

1 トム・ボーイの朝は悪夢で始まる

指先から、ぞわぞわが伝わってくる。

誰かが、ボクの指をつかんでる。

振り払おうとしても、振り払えない！

紫色のマニキュアの手がボクをつかまえてる。

「ねえ、カオルくんの指って、とってもきれいだ。女の子みたい」

甘ったるい声で上目使いに、ボクを見ているのは。

毎日、ライブハウスに押しかけてくる、あのアマゾネスみたいなおネエさんたちのうちの一人。

「ちょ……ちょっと……あの……あの……」

わけのわからない言葉をつぶやき、逃げようとするけど、何故かボクは逃げられない。

「カオルくんの髪って、茶色くてふわふわして……女の子みたい……」

紫色の口紅の耳まで裂けた口が、近づいてくる。

「ゲ！ さ……さわるな！」

ボクはムダな抵抗と知りながらも、くもの巣^すにかかった虫みたいに暴^{あは}れてる。

「カオルく——ん！」

「わっ！ ボクは……ボクは……女の子なんだ!!」

叫んだところで目が覚めた。

見なれた部屋の中。

デビッド・リー・ロスやU2やエリック・クラブトンのポスターが、ボクに向かってセクシーな目ざしをなげかけてる。

「ああ、びっくりした……いつものよりひどい夢」

最近、ますますエスカレートしてきた親衛隊の女の子たちのアタックに、ちょっとノイロ^ろーゼ気味なのかもしれない。

ベッドの中から手だけ伸ばして、カーテンを開けた。

陽^ひざしは、まだ柔らかい。

今日はうれしい日曜日。

高校生にとって、一番うれしい日なのだ。

「さてと……」

起きて、パジャマのまま顔を洗いに階下へ降りて行く。

洗面所で鏡を見ると、さっきのコワイ夢のせいかな、やつれた顔。

歯をみがきながら、ボクはほっぺたや顎を撫でてみる。

ヒゲ……はえてるわけ、ないよな。

「早いね」

母さんが後ろを通りながら声をかけてくる。

「うん」

「また練習？」

「そう」

「たまにはウチにいたら？」

「ヤダよ」

どこにでもある、高校生と母親の会話。

違うのは、そこに割り込んでくる、

「母さん、お茶！」なんて野太い声がないこと。

つまりウチ、崎谷さんちは母子家庭なのです。

髪は寝ぐせを、ちょっとブラシと指で直して。

あと一か月もはいたら雑布ぞうきんにした方がいいというような、すり切れたジーンズに、白いTシャツを着た。

鏡をチラッと見ると、

「うーん、イイ男！」と自分で自分に酔いしれちゃう。

だけど、鏡の中にイヤなものが映うつってる。

ああ、日曜日ぐらい、絶対見たくないもの。

ほんとは、もう一生見たくも着たくもないもの。

紺色こんしきのセーラー服。

そう、ボク、崎谷カオルは、女の子なのだ。

正真正銘しょうしんしょうめいそうかどうかは、調べたわけじゃないから、わからないけど。

とりあえず戸籍上。

それから、構造上も。かすかに、ソレらしい。

でも、それよりも何よりも、ボクはまずロッカーなのだ！

札幌さっぽろあたりでは、知らない人は全く知らないけど、高校生、特に女の子の間では、最近ちよっと噂うわさのロック・バンド。

Aチーム——特攻野郎じゃないよ——のボーカリストがこのボク。

大学生やおとなの男どもに混じって、結構イイ声聴かせてくれる、という評判なのだ。今日もこれから、スタジオでリハーサル。

そのあと、夜からライブ。

充実したミュージシャンの一日が、今始まったわけ。

考えただけで、頭クラクラするような今朝の夢のことはもう忘れて、みんなが待ってるスタジオへ、いざ！

狭い通路を通り抜けて、楽屋裏から表へ出た。

急に目の前がパッと明るくなって、ボクはまるでモグラになった気分。

「キャー!!」という叫び声が押し寄せてきて、ボクは一瞬ギクリと足を止める。

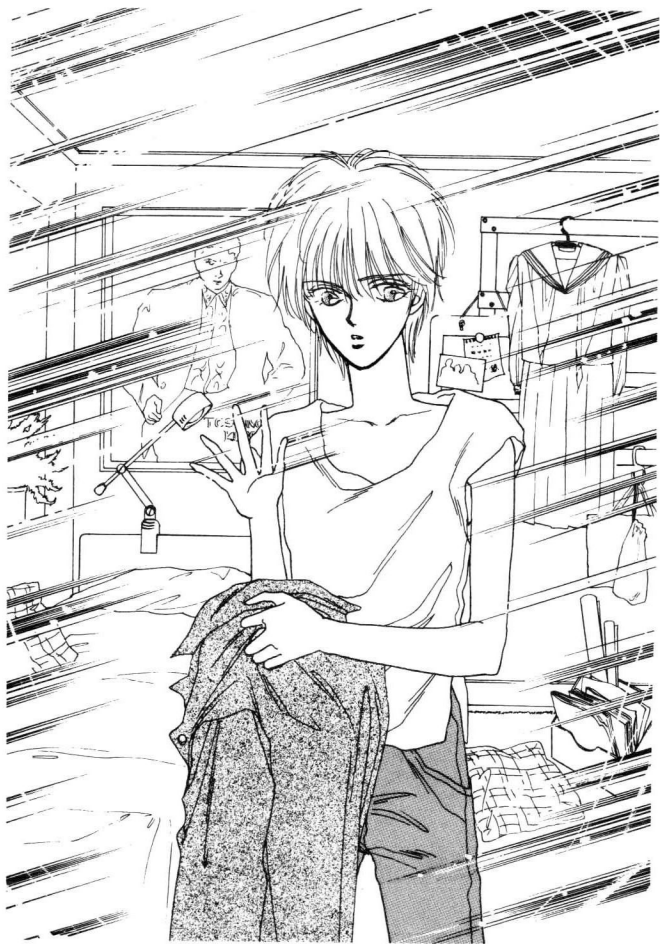
いつまでたっても慣れることがないよ。

津波みたいにボクをのみ込む女の子たち。

「カオルくん！」

「カオル!!」

歩くうちに、花束やプレゼントやぬいぐるみが胸に押しつけられて山盛りになってく。



「サンキュー」

「握手してよ！　ねえ！」

「カオルくん！」

「ども」

「キャー！　口きいたあ！」

「かわいい——！」

何をしてもキャーキャー言う女の子たち。

ヒラヒラのフリフリ、着飾ったかわいい女の子たち。

ウェーブのロングヘアにリボンを結んで。

この子たちとボクの違い。いつも驚いてしまう。

「カオルくん！」

「ねえ、こっち向いて」

カメラを構えた少女の方を何気なく振り向いたら、フラッシュの嵐。

目をかばった手で、髪の毛をかき上げる。

いつものことだけど。

女の子たちの視線に混じって、カオルを見つめてるボク、崎谷カオルがいる。

何だ？ こいつ……。

変なヤツ、って。

通りに停とまってる領りやうクンの車まで、やっとたどり着いた。

みんな、もう乗ってる。

ボクが乗りこみ、楽器車と2台、並んで走り出した。

「ヒュー」大きなため息。

「ご苦労！」

ベースの松井まついクンが助手席から声をかけてきた。

これが、ボクの「ロッカー」のほうの生活ってわけ。

松井クンは、北大の農学部のうぶくの3年生で、寒冷地農業の研究けんきゆうをしてる。

運転してるのは、お坊ぼくちやまタイプの、18歳の浪人生ろうにんせい、相川あいかわクン。

相川クンは、ドラムス担当。

いつも沈ちん着冷静れいせいな石田いしだクンは、キーボーディスト。

今流行の、イカの「フリッター」じゃなくて、「フリーター」という変な肩書きの遊び

人。

で、このボンコツ・サニーの持ち主は、宮原みやはら領クン。